授業者も参加者も創る!!高まる!!広げる!!

西部の英語科の未来へバトンをつなぐ

令和2年 12 月発行
西部教育事務所

英語科
授業づくり講座
四万十市立中村西中学校

西部管内の講座関係のＨＰ

PROGRAM 7　The Wonderful Ocean (SUNSHINE ENGLISH COURSE 1)

授業者 ： 森原 朋生 教諭 (T1)、 谷岡 大洋 教諭 (T2)、 Levi Malcolm (ALT)

教材研究会 R2. 10. 2（金）

授業提案

中村西中学校1年生 「話すこと[発表]」ーイに関わる「CAN-DO リスト」形式の学習到達目標

日常的な話題について、事実や自分の考え、気持ちなどを、メモをもとに整理し、簡単な語句や文を用いて**まとまりのある内容を話すことができる**。

POINT 1

単元ゴールの言語活動

小学生に中村西中学校について知ってもらえるように、中村西中学校の先生やイベント、部活などについて、事実や自分の考え、気持ちなどを整理し、簡単な語句や文を用いてまとまりのある内容を話す活動。(ビデオレター)

今回は本単元の「説明する・紹介する」という題材の特質を生かして、本校のことを知ってもらうために説明する・紹介することを単元ゴールの言語活動として設定し、単元を通して学習する。

小学生に中学校を魅力的に感じてもらえるには、どのような語句や表現を使えば良いか、どのような呼びかけをすると良いか等も含め、文章としてまとまりのある内容で話せる力を付けていきたい。

POINT 2

資質・能力を育成するための単元づくりの POINT 1

1. 育成を目指す資質・能力の明確化 ～育成を目指す資質・能力を起点として授業を描く～
2. 資質・能力の育成を図る言語活動の設定 ～教科書単元の特質を踏まえて～
3. 生徒の思考を促す「目的・場面・状況」の設定と明確化
4. 単元を通して一貫した言語活動の設定と具体的な表現の設定
5. 系統性を踏まえた指導の精選と充実

協 議

単元ゴールの言語活動について

「言語活動の内容」と「単元末に期待する生徒の表現」は適切であるか。

○ 活動の目的と内容が明確である。
○ 生徒が意欲的に活動できる単元ゴールとなっている。

■ 疑問詞 who, when も使える単元ゴールの設定が必要ではないか。
■ ビデオレターは内容に変化を持たせると良いのではないか。

POINT 3

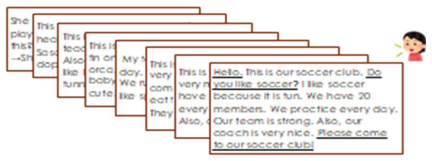
■ 小学生のニーズを把握し、相手意識を持たせる工夫が必要ではないか。
■ 生徒はマッピングをもとに羅列的に話す可能性がある。マッピングをつなぐ指導を行うと、because や and なども自然に出てくるのではないか。

単元計画について

単元ゴールに向かう単元構成となっているか。(教科書の有効活用含む)

○ 単元を通して教科書の内容をリテリングさせたり、学校の先生方やイベント等について説明させる計画となっている。
○ 各時間の目指す表現についても、文の量が増えたり、自分の気持ちを表す文が加わったりするなど、生徒の表現に高まりを求める計画となっている。

POINT 4



POINT 5

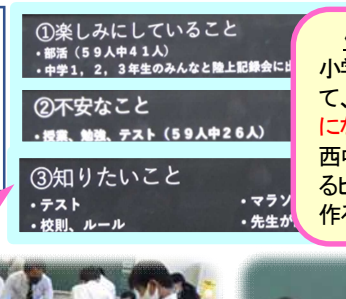
■ 人についての紹介は Program５や６でも行っているため、人以外の紹介についてもう少し扱っておくと良いのではないか。

授業研究会 R2. 11. 9（月）

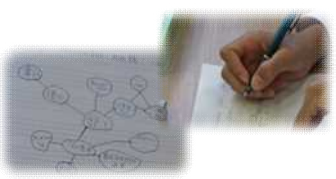
教材研究会を受けて

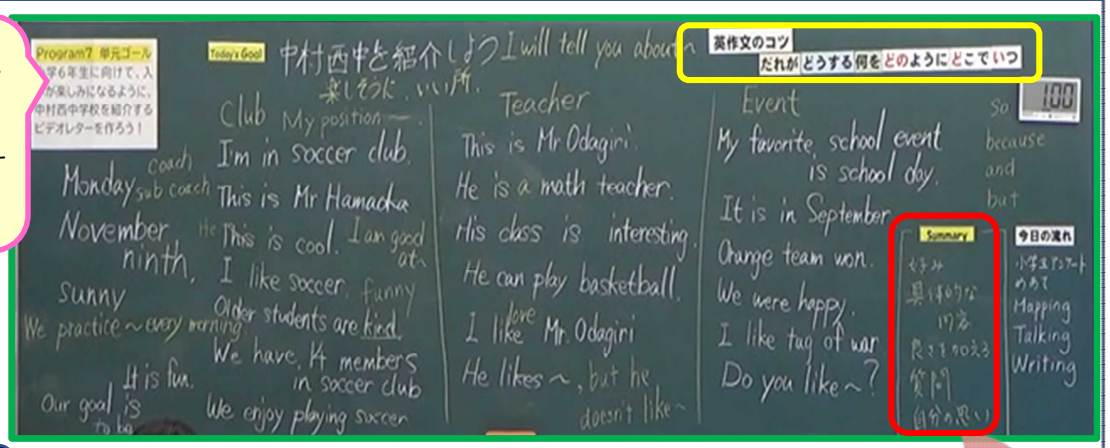
- 構成力を高めるために、マッピングを工夫する
- 小学生のニーズを知ったうえで表現を工夫させる

小学生の状況、ニーズ



〈単元ゴール〉
小学6年生に向けて、入学が楽しみになるように中村西中学校を紹介するビデオレターを作ろう！





文部科学省初等中等教育局教育課程課
山田 誠志　教科調査官より指導・助言

＜資質・能力の育成に向けた授業づくり＞

1　言語活動を通して資質・能力を育成する ～自校の「CAN-DO」の達成に向けて～

新学習指導要領の英語科における最も大事なキーワードは「言語活動を通して資質・能力を育成する」ということである。「言語活動を通して」とは、「取り組ませて学ばせること」である。

例えば、中村西中学校であれば、自校の「CAN-DO」の達成に向け、マッピングをもとに原稿を準備せず話させることに徹するなど、単元を通して資質・能力の育成を図っている。

2　ゴールで表現させたい英文を明確にしておく ～中間指導で表現を引き出す・引き上げるために～

指導者が授業前に最低限やっておかなければならないことは、その時間に「どのようなことを言わせたいか」を明確にしておくことである。

中間指導は、生徒の発話をもとに教師側の求める表現を引き出したり引き上げたりするものであるが、その明確なイメージがあることによって実現できるのである。

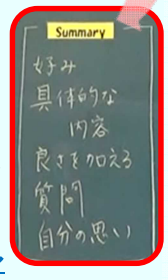
＜付けたい力に向けた中間指導＞

1　付けたい力に向けた指導と評価の一体化を図る ～本時の課題に立ち返る～

来年度からの評価では、「知識・技能」は「英語使用の正確さ」を、「思考・判断・表現」は表現領域では「表現内容の適切さ」を評価することになる。本時の評価の観点は「思考・判断・表現」であったため、内容に関する指導と評価が必要であった。

単元ゴールに立ち返り、小学生の「不安なことや楽しみにしていること」等をより意識させ、英文の正確性だけでなく、内容面に関する指導と評価を行う必要があった。

2 「どのような内容を話せば良いか」を板書で可視化する



生徒の発話を板書すると後の活動でそれを参考にできる。中間指導の際、その英文は「どのような内容を伝えているか」を生徒に問い、その内容項目（＊黒板赤枠内の項目）を英文に合わせて記載すると良い。特に slow learner にとっては、本時の課題に対して「どのような内容を話せば良いか」が分かり効果的である。

3 「気付き」を促し、適切な英文を導き出す ～2つのアプローチから～

生徒の表現を正しい英語に直したり、言いたいことを英文に導いたりするには大きく２つの方法がある。１つは「他の類似の英文を聞かせて気付かせる」ことであり、もう１つは本時のように「文構造に着目させて（＊黒板 黄枠の部分）気付かせる」ことである。「文構造」から迫る方法は、ある程度知識が溜まってきていないと難しい場合がある。「他の類似の英文を聞かせて気付かせる」という方法を使えば時間もかからず、生徒に気付かせ、導き出せる場合もある。

参加者の声

- 今回の講座から学んだ最も大切なことは、一貫した言語活動を生徒の具体的表現イメージを持って繰り返し行うということです。
- 教科書とリンクした単元ゴールの設定と、中間評価では内容にも焦点を当てて指導することを意識していきたいです。
- 本時の課題に立ち返り、中間評価後には個人で再構築が図れる場面を入れるなど、自分自身が課題としている評価について学ぶことができました。